

# 建築・土木のコラボレーションを考える

## —まちづくりを中心に—

**高田 弘子**

都市調査室代表

**卯月 盛夫**

早稲田大学教授

**岸井 隆幸**

日本大学理工学部土木工学科教授

**久保田 尚**

埼玉大学大学院理工学研究科助教授

—司会—

**小場瀬令二**

日本建築学会編集委員会委員  
筑波大学社会学系教授

**大竹 敏雄**

土木学会誌編集委員会委員  
前JFR東海技術本部主幹、現日本機械保線(株)経営管理部長

### 建築も土木も、空間を作っていくという点では同じ

——これまで建築分野と土木分野は、お互い近い学問分野であるにもかかわらず、それぞれ別の体系として発展してきました。しかし、最近環境問題や公共事業に対する批判のなかで、建築と土木の協力が求められる場面も多くなっています。とくにまちづくりにおいて、両者の一致協力は不可欠であろうと思われます。その際、建築と土木でどのようにしたらうまく協力していけるのか、どのようにコラボレートしていけるのかまで含めて議論したいと思っています。

**高田** 私の専門は社会学ですが、まちづくりで最初に注目したのはコミュニティの問題です。昭和40年の前半に、コミュニティ計画、コミュニティ形成に注目し、社会調査、意識調査を行ってそれを数量化しようとした。私の建築や土木の方々に対する思いは、結局コミュニティ形成論は建築系の人に持っていていかれて、社会調査系の数値で扱う仕事は土木系の人に取りられました(笑)といった印象です。

当時、土木系の人が私にこんこんと説明をされたなかに「骨格をつくるのは土木である」ということがあります。ですから、都市計画の骨格は道路で、それをつくるのは土木の人。そのなかに建物を埋めるのが建築の人、という単純な理解が私のなかに育っていきました。でも「人はどうするの、人の動きはどんなの」といってましたら、土木の方から声がかかるようになりました。

一緒に仕事をしていくと、土木と建築では用語がまったく違います。そこで共通の用語をつくるか、両者をつなぐコーディネートの役割を社会学がやれそうだと気づいて、両者から学び始めたのが、最初の取り組みでした。

——高田さんは、名古屋郊外の三好ヶ丘ニュータウンの計画で住都

公団とお仕事をされましたが、建築や土木の人と一緒に仕事をして、やりにくかったところ、やりやすかったところはありませんか。

**高田** 当初、住都公団では“素朴な田舎にできる団地”と考えていたようですが、私の意識では小都市、シティ感覚が十分通用するところだと思っていたから、そこにコンセプトのズレはありましたね。全体を考えると、同じような建物ばかりを作ると街の活力、魅力が減っていきます。そこで私は、いろいろな形の建物と住まい方があり、いろいろな人が集まる街並みのようにしたいと要望しました。これが、最終的には三好ヶ丘を面白い街にしたと思っています。

さらに、仕事を進めていくうえで、公団組織の縦割りも痛感しました。たとえば、地盤をやるのが土木系で、そのうえにモデルハウスや住宅計画をするのは建築系の人だった。なぜ、一緒にやれないのかなとずっと不思議に思っていました。

**卯月** いまはまちづくりという言葉が乱用されていて、その時に必ず建築出身のまちづくり、土木出身のまちづくりという前置きがあります。そこにひとつの問題があるような気がしますね。私自身13年間行政にいた経験から言えば、都市計画、まちづくりを担っている人たちの、出身別の考え方の違いや、縦割りの発想は確かにあったと思います。

もちろん、出身も極めて重要なのですが、最初から「私は都市計画が専門です」「私はまちづくりが専門です」という人はいません。それは、行政への就職の時に、職種として都市計画やまちづくりがないからです。都市計画、まちづくりというのは、やはり縦割りではなく、ある地域・地区を対象にし、ソフトもハードも造園なども含め、総合的に横つなぎをしなければ



高田弘子／たかだ ひろこ  
1943年愛知県生まれ／金城学院  
大学卒業／都市社会学・地域社  
会学（コミュニティ計画）／共  
著に／共著に「今日の家族」  
（ミネルヴァ書房）、「地域の社  
会学」（税務経理協会）、「人と  
車・おりあいの道づくり」（鹿  
島出版会）、「21世紀の中部圏」  
（中日新聞本社）ほか

いけません。ですから、この場  
でぜひ言いたいのは、建築出身  
でも土木出身でも社会学出身で  
も、最低限の都市計画のことを  
学ぼう、やろうという人をきち  
んと採用して、その人にこそ行  
政の縦割りを横につなぐ役目を  
担ってほしいと思うのです。

本来、土木の方は非常に調整  
能力があると、僕は評価してい  
ます。それはまちづくりの時に、  
警察とか、電力会社とか、ガス  
会社とかいろいろなところと調  
整をしないと道路の設計ができ  
ないことを身体で感じているか

らです。一方、建築のいいところは、最後の細かなデザインま  
できちんと見ることができることです。そして、事務系の方は  
住民の視点、ユーザーの視点をもっている。その3つがうまく  
かみ合うと、総合的なまちづくり、都市計画ができると思うの  
です。

**久保田** “骨格は土木”という考え方は確かに土木の中に伝統  
的にあって、これまで広域的な幹線道路をつくることは得意で  
した。しかし、最近では、建築とややオーバーラップするよう  
なまちづくり、道路でも地区道路といわれるようなまちづくり  
レベルの道路も手がけるようになっていきます。地区道路では建  
築的な発想も必要になりますが、土木の人たちは、実は自分の  
頭、手でデザインするのが苦手なんです。

昭和55年ごろ、その地区に一番ふさわしい道路づくりを“コ  
ミュニティ道路”というかたちで作り始めたのですが、結局  
非常に画一的なものになってしまったことが、その典型例です。  
ああいう場面に建築の人が入ってデザインしてくれれば本当に  
いいことだと思います。最近はいろいろな場面でデザインの余  
地が出てきましたので、まさに建築と土木のコラボレーション  
のひとつが、まちづくりレベルの道路になると思っています。

**岸井** 土木は、治水、港湾、鉄道など、日本の近代化をリード  
し、安定した生活のベースを築くことに一生懸命努力してきま  
した。いずれも大きな仕事で、かつ多面的に広くやらなければ  
いけないので、どうしても組織的に動かざるを得ない。です  
から、組織で動くことは得意ですが、それがややマニュアル化し  
すぎてしまった。公平で平等な基盤空間を提供することには強  
い力をもっていますが、もう少し自由にやってもいいのではな  
いかという反省もあります。

教育でも、三次元や空間の教育をもう少し充実する必要があ  
ると思います。強度に関する教育は充実していますが、構造物  
と周りとの関係という点で、建築が単体しか扱わないのと同じ  
ように、土木でもあまりやっていないのかなと思います。

土木も建築も空間をつくっていくという点では同じ仲間です  
から、お互いに協力しなければ良いまちづくりはできません。  
こういう機会を通じてお互いがやっていることを素直に理解し、  
あるいは議論し合うことが重要だと思います。

**毛筆で書くのか、コンピューターで書くのかというように、  
やり方が違うだけで、追求しようというものは一緒**

——建築では昔から三次元の空間を重視してきましたが、最近  
は土木でも“土木景観”が重要になってきて、建築的な教育を  
させたほうがいいのではないかと議論もあります。そのへんは  
いかがですか。

**久保田** 実際は非常勤の先生にお願いしているケースもあり  
ますが、各大学の土木工学科のなかに少なくともひとつは、建  
築系の授業はすでにあると思います。また、我々の学科ではいま、  
カリキュラムを来年度から変えようという大議論をしています。  
“ティーチングからラーニングへ”と言っていますが、手を動  
かしてものをつくる、良いものをつくる訓練をさせようという  
動きは、我々の議論の中にもありますね。

——建築学科では、学生に対して土木的な発想を教えていますか。

**卯月** 早稲田大学の場合、理工学部の建築学科ではやっていま  
せんが、僕のいる芸術学校の都市デザイン科ではやっています。  
建築の設備や構造よりも、むしろ道路や土地造成の図面の読み  
方など、土木分野に近いことを積極的に教えています。都市や  
まちづくりをやる人間にとって、それが必要だからです。世の  
中に出て異分野の人たちとコラボレートするとき、それぞれの  
分野によって表現手段やボキャブラリー、言葉づかいの裏にあ  
る背景など全部違うわけで、そのことをまず理解しなければい  
けませんからね。

僕の教育目標は、都市や地域に関する最終的なコーディネー  
トができる、かつデザインができる人間を育てることですから、  
土木、造園の図面が読めることは必須だと思うのです。

**高田** 私の事務所にもアルバイトの学生さんがいるのですが、  
建築出身、土木出身と分けるのが難しくなりました。最近は大  
学の学科も“環境〇〇学科”というような名称が多くて、実際  
に何をやっているのかわかりにくくなっていますね。

ただ、私のところにアルバイトにくると、どうしてもまちづ  
くりに興味を持つのですが、そのとき彼らに欠けている能力は、  
自分の考えを一般の人に上手に説明する能力です。土木の人は  
すぐ断面を描きたがるし、建築の人は絵を描きたがるのですが、

描いてしまうとそれでおしまいなんです。そこに至るプロセスを説明する説明力がない。

それと、都市計画では、土木も建築も、最終的な目標は同じはずよね。たとえば言えば、毛筆で書かか、コンピューターで書かかというやり方が違うだけで、追求しているものは一緒です。ですから、もう少し歩み寄るとか、肩を張らずに一緒にやっていただけるといいなと思いますね。

**久保田** 確かに、大学の学科の名称からどんどん“土木”“建築”がなくなっていて、一見融合しているかのようにも見えます。しかし、実際は名前が変わっただけで、学科の性質として融合しているところはなかなかないですね。“土木”も“建築”もそれぞれ歴史がありますから、すぐ一緒になれというのは難しいと思いますが、都市計画のように両者が重なっているようなフィールドで一緒にやることはできると思います。

たとえば、卯月先生の都市計画の授業と私の都市計画の授業を半分ずつ交換してみるとか、そういうコラボレーションがあっても面白い。

**卯月** わけのわからない名称の学科には、僕は反対です。建築なら建築、土木なら土木でいいじゃないかと思うのです。そのなかに、都市計画とかまちづくりという授業をそれぞれきちんと入れて、先生の方でどんどん交流して、別の学科で教えていけばいいわけですから。

それよりも、まずは建築なら建築、土木なら土木、造園なら造園、きちんと基礎教育はやってほしいと思います。なぜなら、基本が分からずに都市計画しか勉強していない人ほど使いにくいものはないからです。結局、基礎的なことができて、その上に都市計画というのがあるのです。

**岸井** まちづくりでは協調・調和が必要で、皆さんそのことはかなり意識していると思うのですが、残念ながら教育現場では教える側にそういう経験がない。建築の先生は交通量推計をやったことがない。土木だって、デザイン的なことはそんなにやっています。ですから、もっと教える側のコラボレーションが必要かもしれませんね。特に、両学会で今回のような企画を試みたわけですから、学会同士で引き続いて議論していただければいいと思います。

### 両学会を通じて公共事業の難しさなり意義を 子供たちに教えていくのも大事

——学際的な能力を発揮するには、ある専門については深く熟知して、その深く熟知している専門家が、専門を横に広げ、いろいろなことを習得していく。そういうある種の矛盾した能力が必要で、教育は単に広くやればよいというものではない、と思うのですがいかがですか。

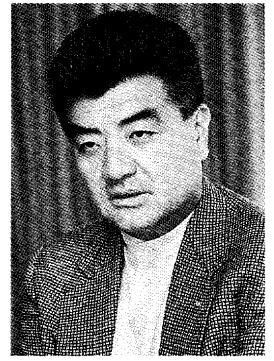
**岸井** 10年前に都市環境デザイン会議ができたときに、都市計画、土木、建築、造園、プロダクトデザイン、サイン、照明などいろいろな分野の人たちが集まりました。結果的に、お互いに顔と名前、何を考えているのかが理解できるようになりました。その時に初めて一緒に仕事をしてみようということになって、実際にやってみると、これが実に面白い。お互いに得意分野があって、それらをぶつけ合いながら仕事をする楽しさを実感しました。

もちろん、専門のない人が集まってもコラボレーションにはならないでしょう。ですから、ある自分の分野を持ちながら、同時にお互いが理解できる場面をなるべく多くつくりあうことが必要なのではないでしょうか。

**高田** 以前、住民の人たちが直接参加する“手づくり公園”をお手伝いしたことがあります。都市計画決定された公園はつくり方が非常に従来型で、そのしくみをひとつずつ崩していくのは大変な作業です。そのときは、行政の人を説得することに全エネルギーを費やしました。そこで感じたのは、どうも土木も建築も、既存の制度で守られているのではないか、ということなんです。私がこうしたいと言っても、「そんな制度はない」「それは基準に合わない」といわれる。ですから、制度や法律にも変えなければいけないことがたくさんあって、それにも挑んでほしいと思っているのですけどね。

**岸井** 建築と土木では、管理責任の問題の違いがあります。たとえば、建築では最近、建築家の瑕疵責任が問われ始めていますが、土木はそこがまだはっきりしていません。土木では、管理者・発注者である行政に責任があるというのが従来の考え方です。ですから、行政も一番安全なところで仕事をせざるを得ませんね。

**高田** たとえば、公園で火を使いたい、ということがありました。自分たちで管理をしたら火を使わせてもらえるのかとか、話題になった。しかし、都市計画公園では宗教的な行事をしてはいけないことになっているのです。行政に行っても、だめだと言われるのは分かっているから、では黙ってやろうという変な住民の知恵が生まれたりする。ところが、その公園は神社の一部を削ってできた公園だったのです。そのいわれを聞くと、



卯月盛夫／うづきもりお  
1953年東京都生まれ／早稲田大学理工学部建築学科卒業／同大学院、シュトゥットガルト大学大学院修了／都市計画・都市デザイン／著書に「市民参加の国土デザイン、豊かさは多様な価値観から」（日本経済評論社、2001）、「まちづくりの科学」（鹿島出版会、1999）ほか



岸井隆幸／さしい たかゆき  
1953年兵庫県生まれ／東京大学  
工学部都市工学科卒業／同大学  
院修了／都市計画／博士(工  
学)／共著に「既成市街地の再  
構築と都市計画」(ぎょうせい、  
1999)、「分権社会と都市計画」  
(ぎょうせい、1999)、「都市計画」  
(コロナ社、1998)／1995年交通  
工学研究会研究奨励賞、1997年  
日本大学理工学部学術賞受賞

やってもいいのではないかなと  
みんな思うわけですよ。確かに  
制度や法律は、全部一律として  
やってきたことに良さもあるの  
ですが、その発想をそろそろず  
らしていただいてもいいのかな  
という気がしますね。

**岸井** 道路に関わって沿道の公  
園設計の話をしたときに、地元  
の皆さんがまずおっしゃったの  
は、「管理までうちにくるので  
はないでしょうね」ということ  
でした。設計に参加するのはい  
いけれど、管理までやるのはか  
なわないと。皆さん、管理が大

変であるということを理解しているのです。

**卯月** そういうことをなぜ住民が言うのか、それを言うまでの  
計画と参加プロセスが重要だと思うのですね。住民からそうい  
う意見を言われないようにするにはどうしたらいいのか、また  
言われたときに、どういう話し合いをしていくのが計画者側  
に問われているのです。

**高田** 一般に、行政の人は、そういうことを早めに言いたがる  
のですよ。でもそうではなくて、本来は住民の人たちと、ここ  
に砂場をつくろうとか、ここに木を植えようと言って時間をか  
けて話し合っていけば、そのうち「こういうものは自分たちで  
管理したいね」と、住民の方から自然に言うようになるもので  
す。私はそう信じています。

**岸井** 均質な地域の身近なまちづくりは、参加で解決できます  
が、社会の空間は単独で存立しているわけではないですよ。広  
域的な施設や嫌悪施設も、皆の生活を支えるためには必要なわ  
けです。ですが、そういうものが必要だという話が「まちづく  
り」という言葉の中からはなかなか出てこない。それが大きな  
問題だと思うのです。

**久保田** それは、教育の問題だと思います。普通の市民が生ま  
れて初めて広域的な公共事業に出会うのは、役所の人が近所に  
測量にきた瞬間だと思うのです。幼稚園から小学校と育ってい  
く間に、公共事業の意義や土木の大事さを、一般論としては一  
度も教わらないですよ。小学校の子なんか見ていると、自分  
たちの街の成り立ちは習うけれど、そこに公共事業という視点  
はありませんね。ゆとりの時間で、学校にもすこし余裕がで  
きていますから、両学会で公共事業の難しさなり意義なり、子供  
から教えていくというのも大事ではないかと思えます。

**高田** いまトンボ池をつくるのが流行っていますけど、それよ  
りも道路はどういうふうにつくってきたかとか、堤防とはどう  
なっているかとかを教える方が大事だと思いますね。

**卯月** 僕は教育を否定はしないけれど、問題はそのやり方です  
よね。教育が大事だといっても、教科書をつくって学校の先生  
が教えるのではだめだと思う。もうそういうやり方をする時代  
ではないだろうと思うのです。たとえば地元の道路、橋や川、  
あるいは過去に起こった大震災など、その地域での具体的な出  
来事を、自分の日常的な生活に引き寄せて学習する必要がある  
と思います。そうでないと、結局いまのボランティアをやれば  
単に大学の単位がもらえるというのと同じように、自分の問題  
として捉えられなければうまくいかないと思うのです。

また、それらは学校の先生だけで教えられるわけはありませ  
ん。行政の人たちであったり、コンサルタントの人たちであっ  
たり、いろいろな地域の人を入れる新しい仕組みをつくらない  
といけませんね。

本や資料にしても、一般の人向けにわかりやすく、土木や建  
築のことを書いた本がありません。ですから、僕らがそういう  
ものをきちんと書かないといけないのでしょうか。

——教育では、まちづくりの実体験も重要だと思います。ただ紙の  
上で教えてもなかなか理解できませんからね。

**岸井** 建築はarchitecture、土木はcivil engineeringで、英  
語にすると非常に響きがいいですね。今、公共事業という言葉  
には、大きなことを権力的にやるというイメージが強く与えら  
れすぎているのではないかと思います。もう一度原点に戻って、  
市民のための空間づくり、しかもそれにアートの要素を加えた  
仕事であることを伝えたいですね。我々のやっていること自身  
がわが人生の一部ですから、楽しくやれる要素を加え、そうい  
う楽しみを分かち合うことが大切だと思うのです。結構面白い  
ですよ。まちづくりって。

**高田** やめられないですね。だから、いろいろなところでやり  
たくなるのです。私はまちづくりをやり始めて思ったのは、こ  
の街のことをよそへ行って宣伝したいということですね。ある  
地域だけで一生懸命やっても、その地域の人は何が起こっ  
ているのか分からない。でも、よその人が来てくれて「ああ、  
いいですね」と言われると、「おい、こんなことがいいのかな」  
と、住民の皆さんが励みます。そういう機会を私は途中途中で  
設けるようにしているのです。みなさんで勉強したり、何かを  
つくろうとしている時に、よその人がきて、「すごいですね」  
と言われると、「すごいってよ」とお互い言い合いながら、皆  
さんの意識がすごく高まったりするのです。

## 100年かかり実を結ぶものもある、 時間がかかってもやるべきことがある

**岸井** 土木の仕事には、100年かかって実を結ぶものもあります。時間がかかってもやれるし、やるべきことがあるのだということも、きちんと伝えたいですね。最近のお母さんはよくおっしゃってくれますよね。自分の時代よりも自分の子、孫の時代に役に立たせたいと。これから高齢化し、リタイアする人が増えてくれば、そういう気持ちも強くなるでしょうから、それは非常に結構なことです。我々自身も専門家という端くれであれば、我々の街がどのようにしてできてきたかを伝えていかなければいけないのではないかと思います。

**卯月** 今の時代、100年先のことを提案できる学生を育てるのは難しいことですね。また、駅前広場を森にしましょうなんという論理が通りにくい時代です。公共事業はみんな悪だという風潮もあります。さらに建築も土木も含めて、市民的に見ればこれまで相当無駄遣いしてきたことは認識しなければいけないと思う。しかし他方、確かに無駄もあったけれど、百年の計ということでは、今までだってすぐれた事業をやってきた人がいました。今の日本に本当に必要なものは何なのかということ、僕らがきちんと発信することが重要だと思います。こういう時代だからこそ、建築、土木の不必要な部分と必要なことを明確に示すことが必要です。

**久保田** そういう意味で、これから育てなければいけないのは、建築、土木すべてを包含して、たとえば市長さんのような目で自分の街を見て、必要なものと不要なものを判断し、100年後必要なのであれば何が何でもやれるような、そういう人です。しかし、そういう人を育てるシステムは現在ありません。ですから、土木は土木、建築は建築の中で、まちづくりができる人の資質と能力をよく整理して、そういった人材を育てられるような教育システムができればいいと思いますね。

## 住民の応援があれば行政も変わっていく、 ひとつひとつ積み重ねていけば、必ず良くなっていく

——土木では最近、土木史のような形で、どうしてこのようなものを作ってきたか、それが現在の豊かな生活をどう支えているのか、という研究が盛んです。都市計画史や建築史では個人の業績を見ているのですが、土木史ではいかがでしょうか。

**卯月** 歴史は重要ですね。もっと、個人の名前を出したほうがいいのではないかなという気はします。土木の場合は設計者の名前がなかなか出ないようになっていますが、責任を持っていただくという意味でも、この橋のデザインはこの人がやったのだと明記したらいいと思います。長い意味で良い面も悪い面も見えてきますが、それで評価することはできます。また、その

ように個人の名前が出た方が、学生にとっても人物史みたいで興味をひくと思います。

とは言っても、巨匠の時代はもう終わりました。これからは、普通の人間ががんばっていいものをつくっていこうという時代で、市民社会とはまさにそうだと思うのです。でも、いまの学生を見てみると、斜に構えていて、今の社会システムのなかでうまく生きよう、生きなさいいけないと考えているようです。規制を壊そう、戦っていこうという姿勢が弱くなっています。

僕はよく学生に「制度は後からついてくる。君が提案すれば必ず変わっていく。たとえ、君一人ではだめでも、仲間を増やして、それから住民の応援があれば行政も変わっていくんだ」ということを言っています。ひとつひとつ積み重ねていけば、必ず良くなっていくと思うのです。

**岸井** 土木は、リーダーがいても結局みんなやってきたことから、作った構造物にはみんなの名前を入れよう、しかも土の下に埋めようという世界です。だから、逆にいまのようなことを言ってあげると、学生も意気に感じるかもしれませんね。建築家の場合は、名前とその人のイメージがすごく先行します。あれはいい面もあるけど、みんながあれだけを目指すというのは、僕はおかしいと思います。

**卯月** 設備も構造も施工者も、全員の名前を並べてあげたいと僕は思うのですけどね。

**高田** 土木の人は年配の人ほど、一緒にやったことに対する誇りがあります。逆に建築はいちいち名前を出していいいますが、土木の人にとっても本当は、あれはうらやましいのではないかなと思っています。でも、土木の人はなかなかいえないのですよね。最近、橋では、景観賞などを受賞すると設計者の名前を出したりしています。

**岸井** うらやましいと思っているとは思いますが、名前を出す傾向にはなってきましたね。

## 骨格と肉が離れている状態 お互いに隙間を埋めていくことが必要

——道路と建物の関係では、街並みが人々の関心になっていますが、土木、建築の取り組みについてはいかがですか。



久保田尚／くぼた ひさし  
1958年神奈川県生まれ／横浜国立大学工学部土木工学科卒業／東京大学大学院修了／地区交通計画、都市交通計画／工学博士／共著に「新しい交通まちづくりの思想」（鹿島出版会、1998）、「地区交通計画」（国民科学社、1992）ほか／「地区交通計画に関する一連の研究」で平成元年日本都市計画学会論文奨励賞受賞



小場瀬令二／おばせれいじ



大竹敏雄／おおたけとしお

**高田** 古い街並み保存に興味を持つのは、圧倒的に建築の方ですね。土木の方も、古いダムには興味があるようですが、街についての関心度がちょっと低いかな。

ただし、建築の人は、古い街を残そうという建物を残したがる。建築の人にはどうしても形のあるものを残そうという感覚があって、それも少し違うなと思っています。そうではなくて、私はその街が昔やったものとか伝統的なものを何かの形で現在によみがえらせてほしいと思うのです。残すものについては、現実生活をしているのですから、まちづくりの観点をもって考えてもらいたいなとも思っています。

**卯月** 保存の話で、たとえばベルリンのIBAでは、道路の線形保存という議論が出ました。つまり、都市の平面こそ保存しなければいけないというのです。時代とともに、建築ファサードや構造は変わってもいい。しかし、道路の線形つまり道路のパターンと幅員は変わってはいけないというのです。ただし、建築のヴォリュームは重要なので、高さや壁面線はこうだということをはっきり規定する。そのなかでは思う存分、建築家に働かせるのだそうです。

その話を聞いて、はっと驚きました。都市の景観というのは、道路の幅員、線形、次に建物なのです。そういう意味で重要なことは、どのような都市空間をつくるか、そして先ほども骨格という話がありましたが、その骨格のデザインの問題なのです。単に建物の保存だけ、あるいはどこかへその建物を持っていっ

てそれが残っていればいいという価値観ではないのです。その現場がどうなるかということを考えると、むやみやたらに道路の幅員を広げるべきではないと思いますね。

**久保田** 日本でも、街並みを残そうという取り組みは結構広がってきていますね。蔵を保存するために道路を広げてはいかんとか、市街地内の遺跡を残そうといったことを、主に建築系のまちづくりの方が中心におっしゃる。ただ、現在の都市計画図を見ると、そこに都市計画道路が入っている。そこからぎりぎりの調整が始まるわけです。「骨格の土木」としては、やはり地域全体の道路網の議論から始めざるをえない。しかし、建築の人はとにかく残すという。

そういうやり取りのなかで、本音としては何とかしたいという気持ちがあって、部分的に拡幅をしないへビタマ道路でもいいじゃないかとか、地域全体の道路網を再検討する中で拡幅を止めるといったように、調整の成果が少しずつ現れてきています。私は、土木も今変わりつつあるし、今後さらに大きく変わる可能性があると思っています。

**岸井** 日本で土地利用計画というとき、多くの場合、公共空間は入っていません。おかしいですね。公共空間と民有空間の関係が本当は最初にあるべきだと思うのですが、今までの役割分担の関係上、土地利用はなんとなく民有地の中の話だけで済ませているのです。骨格と肉が離れているという状態です。建築と土木、まだお互いに隙間があるという気がしますし、それをうまく埋めていかなければいけないと思っています。

——日本の場合は道路と建物がまだ一体化していないというのが、制度的な弱さであり、根本的な問題だと思いますね。これについては、今後大いに土木・建築でコラボレーションすべきテーマだというのがひとつの結論でしょうか。

話はつきませんが、多岐にわたって有意義なお話をいただきました、ありがとうございました。建築と土木の違いも出ましたし、どのようにコラボレートしていったらいいかも示唆いただきました。

本日は、皆さんありがとうございました。

(8月1日 東京・ホテルメトロポリタンにて)

## 建築雑誌11月号予告

### 特集：建築のリスクと保険

最近、リスクマネジメントすなわち保険が建築界でも脚光を浴びつつある。

「リスク」の語源はイタリア語の「risicare」であり、その意味は「勇気をもって試みる」ということらしく、必ずしもネガティブな意味を持たない。すなわち、「リスクマネジメント」は、将来の未知なるものから人々を解放し、果敢に挑戦する仕掛けであり、今後いろいろな分野への展開が期待できそうである。

そこで、11月号では、リスクをどのようにとらえ、どのように認知すべきなのか、また、建築の地震リスクマネジメントや保険に焦点をあてて、その現状や課題、可能性について考える。

〈巻頭対談〉地震リスク低減をめざす横浜市の事例を中心に

高秀秀信・岡田恒男 聞き手：高田毅士

〈論考〉都市社会と技術・環境リスク問題／池田三郎 リスク比較と認知／辻本誠 原子力技術リスクの認知とリスク・コミュニケーション／谷口武俊 産業施設の安全目標／高橋英明 自然災害に対する米国の状況／篠塚正宣 建築物保険制度の現状と課題／坪川博彰 横浜市の地震リスクの低減について／阿部進 保険会社における建物地震リスクビジネス／矢代晴実 建設会社における地震リスクマネジメントの試み／水越熏 地震リスクマネジメントの実際と問題点／水谷守 日本建築学会からの提言／神田順